

優秀賞

『卒業式の歴史学』 有本真紀著

(中央新書・文庫 講談社選書メチエ ; 546)

文学部 4 年 三浦直人

大学 4 年生だから、というわけでもないのだが、卒業式に関する一冊を紹介しようと思う。世に卒業を題材とした書は数あれども、読むと式で泣きたくなくなる本、というのも珍しいのではないか。一般に卒業を扱った本は、現実の卒業式で涙を流したくなるよう、工夫が凝らされたものばかりだからだ。

同級生全員が声を合わせて歌い、“呼びかけ形式”で思い出を振り返る。式の最後には保護者・教員も含め多くの参加者が涙する。我々の知るこうした卒業式は、著者によれば実は、日本に固有の文化であるらしい。そもそも、卒業式と歌、そして涙は、近代日本が発展する中で徐々に結合を強めたものなのだという。

明治初期の学校では、卒業式で涙を流すのは、落第を知らされた生徒のみであった。教員の側も、生徒が泣かないよう指導していた、というから面白い。ところがいつの間にか、卒業式では泣くことが望ましい、という価値観が定着していった。この奇妙な転換は何を物語っているのだろうか。音楽科教育を専門とする著者は、歌を通して、卒業式での涙が「制度化」されていく過程をひもといた。

近代学校創設期の卒業式は、学科試験と一体であった。進級試験という最重要行事のクライマックス場面が証書授与だったのであり、生徒は一学年を終えるごとに(ちょうど現在の終業式のように)それぞれの学年を“卒業”していくのであった。ところが、明治中期に“卒業”と“修業”とが区別されるに当たり、卒業の語には別れのイメージが付加されることになる。以後卒業式は、生徒が歌を媒介として感情を共有する儀式となっていく。

では、卒業式を通じて生徒たちが向かった一つの方向とは、果たしていずこだろうか。無論それは、近代天皇制国家を支える均質な“国民”である、と著者は断言する。「蛍の光」の歌詞に強烈なナショナリズムが盛り込まれていたことを知る者は、現代ではさほど多くない。やがて卒業生は、「歌を歌うのに、どのような感情をもつべきか、どう表現することが望ましいか、どのようにふるまってはいけないのか」(p213)を心得ていき、そこに涙の規範性・適時性が生まれる。

本書によると、我々は卒業式において、自らの意志で涙したのではない。むしろ、国家によって、近代によって、制度によって、泣かされていたのである。「儀式の本質が集団の感情を喚起し行き渡らせることであるならば、卒業式は最も成功した儀式といってよい」(p231)——著者に導かれ辿り着いた不気味な結論に、読者は思わず背筋を寒くすることだろう。

何だか、3 月の卒業式にどんな心持ちで出席してよいものやら分からなくなってしまった。しかし確かに、我々が大学で学んできたことの一つは、常識を疑い、思考の制約に自覚を持つことである。ならば、冷めた眼差しで卒業式を眺め直すことも、ある意味では“大学生らしい”卒業式参加の在り方なのかもしれない。読後ふと、そんなことを考えた。